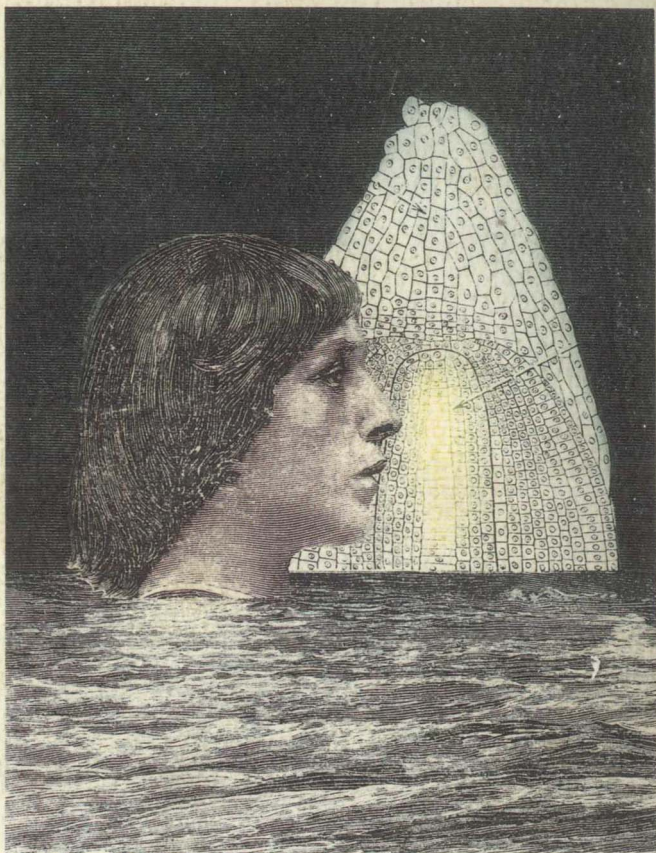


宇宙の旅人

Kiyohiro Miura

三浦清宏



創樹社

宇宙の旅人

Kiyohiro Miura

創樹社

三浦清宏 (みうら・きよひろ)

1930年生まれ。1952年東京大学英文科在学中に渡米。1955年カリフォルニア州サン・ノゼ大学卒業。アイオワ州立大学創作課程修了後、ニューヨーク、パリに滞在後帰国して、現在、明治大学教授。

1978年、短篇「赤い帆」(『群像』)で芥川賞候補になる。1988年、短篇「長男の出家」(『海燕』)で第98回芥川賞受賞。

著書『長男の出家』(短篇集、福武書店)、『イギリスの霧の中へ』(エッセイ集、南雲堂)他。

宇宙の旅人

0093-0271-4249

1988年6月30日 初版第1刷発行

定価 1,500円

著 者 三 浦 清 宏

装丁原画＝野中ユリ 装本＝中垣信夫

発行所 株式会社 創樹社

東京都杉並区上荻1-8-8

野村荻窪ビル6F

〒167 振替 東京 3-138079

電話 東京 (03) 220-2771(代)

印 刷 ミクニ印刷株式会社

製 本 岩佐製本所

© Kiyohiro Miura 1988 Printed in Japan

乱丁・落丁本はお取替え致します。

目次

地下室の夢 | 5

父と電線 | 37

虚 空 | 73

宇宙の旅人 | 111

ボブ・チン・レストラン | 151

行け、海の彼方へ | 195

ボブ・グリーンとチコンキ屋のせがれ | 229

あとがき | 247

装丁原画 野中ユリ 「海のナルキッソス」 (銅版画集『METAMORHOSES』／ギリシア神話／より) 装本 中垣信夫

宇宙の旅人

地下室の夢

武郎がはじめてアメリカに行ったとき、最初に入れられたところは、地下室だった。

「あなたの部屋に案内しよう」

と、肥った夫人が先に立ってゆき、キッチンの奥のドアを開けると、暗い穴があった。戦災を生きのびた古くて重い革のトランクを下げ、人間とトランクの重みをやっと支えて、ぎしぎし鳴る木の階段を、裸電灯の薄暗い明りを頼りに夫人の大きな尻に、トランクがぶつからないように、気をつけながら下りて行った。

片隅には古い家具やがらくたが積んであった。別の隅には、大きなボイラーがあり、排水管やパイプ類が、壁や天井を走っていた。壁際には、洗濯機や乾燥機が並んで置いてあり、その前の床には、籠からあふれた洗濯物が散らばっていた。

部屋らしく見えるものは、まん中に置かれた大きなベッドと、その片側と足もととを囲んで、天井に渡した針金からぶら下っている安物の薄いカーテン。枕もとに置いてある、用だんすの

ように大きく、体にくらべてばかに小さいダイヤルの窓のついた、古いラジオであった。

「これはグランマのところからもらってきた、古いけど、とてもいいベッドなのよ」

彼を迎えるために、特別の努力を払った、とても言いたげに、片手でボンとベッドをたたいてから、夫人が階段を上って行ってしまった後、武郎はしばらく周囲を見廻していたが、やがて、靴のままベッドの上に横になった。

頭のすぐ上の、蜘蛛の巣がからまっている、すすけた荒削りの太い梁を眺めながら、武郎は、その日、朝陽の中で見た、虹のように海にかかる金門橋や、青空の中の坂道を上っていったら急に現れた、ガラスのお城のようなドライヴ・インや、軍隊風の舟型の帽子の下から、金髪をなびかせて車の窓に近づいて来た、映画の中から出てきたようなウェイトレスのことなどを思い浮かべた。

（どうして自分は、こんなまっ暗なところにいるんだろう。今日自分の見たものは、幻だったのだろうか）

彼は更に、太平洋を横切って来た、十四日間の楽しかった毎日を思い出した。

ふんだんに量があって、しまいに誰れかが、「こんなにあぶら臭いものばかり、食べられるか」と言った食事も、配給のとうもろこしの粉や、雑炊ばかり食べていた武郎には、何という美味だったろう。

アメリカから送られてきた、たった十ドルの使い方も知らずに、ポケットに入れたまま、彼は毎日、新しい友人たちと語り合い、女の子とダンスをし（それもはじめての経験だった）、デッキの上から海を眺め、三等船客の入ってゆけない甲板を、髪を光らせながら歩いている白人の女の子を遠く見て、やがてああいう娘たちとも友達になれるのだと、胸を躍らせた。海が暮れてゆく頃、デッキのロープの輪の蔭で、ダンスの相手の日本人の女の子と、体を固くしたまま喋り続け、ついに食事の銅鑼が鳴るまで、彼女の手をとることさえ出来なかったり、その後、彼女が二世風の青年と、楽しみに英語の会話を交しながら、身軽に動き廻っているのを見て、嫉妬し、

（しかし、アメリカに着けば、こんなことはみんなおしまいになるんだ。ぼくにはアメリカが待っている）

と自分に言い聞かせたこともあった。

「サンタクララ？ あなた、サンタクララにいらっしやるの？ サンフランシスコから遠いかしら。遊びにいらっして。ときどき会いましょうよ」

潮風の中のA子の声が、耳に残っている。

そのとき武郎は、うなずきながらも、こう言った。

「ぼくは、カリフォルニアには長くないかもしれないんだ。学校を出たら、いろいろなところ

ろに行きたいんだ。ニューヨークにも行ってみたい。パリだとか、ローマだとかへも……」
「いいわねえ。そんなに長いこと家に帰らなくていいなんて……。わたしは、やっと一年間のお許しをもらってきたのよ。お父さんやお母さん、何にも言わないの？」

武郎はちょっと優越感のこもった微笑を浮かべた。

「おやじはぼくがいなくて、肩の荷が下りているだろうな。学費を出すのはたいへんだったから。ただ、いいだけいて、思う存分勉強して来いと言ったよ」

「じゃ、お母さんは。いっしょにいるときはうるさいと思ったけど、別れてみると、やっぱりいちばん思い出すわ」

「おふくろは五年前に死んだ」

「それじゃ、お友だちは」

「ぼくは何もかも忘れるつもりで、日本を出て来たんだ」武郎は一種の快感に駆られて喋った。「これから別な人生が始まるんだ。どんなことが起きかわからないけど、ぼくは恐れずに、それを自分の中に取り入れてゆきたい。いままであったことに束縛されずに、自分を自由に変化させてゆきたい。もし、アメリカ人になるのがよければ、アメリカ人になってもかまわない。日本に帰らないなら、帰らなくてもいいと思う。ぼくは自分をボールのように、アメリカという海の中に投げ込んで、どっちに行くか見てみようと思うんだ」

「あなたの言うことはよくわかるわ」

A子は興奮して叫んだ。

「わたしもあなたのようにになりたい。でも、わたしにはそんな勇氣はなさそうだわ」

彼女は遠くを見るような眼で、武郎を見た。

「あなたって、こわいわね。わたし、あなたと友だちになりたい。でも、こわいわ。わたしなんかほったらかして、どこか遠くへ行ってしまうそう」

（そんなことはない）という言葉が、喉から出そうになるのを、武郎は抑えた。彼の頭の隅には、遠くから甲板で見た、海から生れた女神のような白人の女の子の姿があった。しかし同時に彼の胸は、ロープを枕に彼の横に並んだ、白いソックスをはいた形のいい脚、兎のような柔らかいセーターに包まれた小さいからだ、に対する憧れでいっぱいだった。

武郎は、毎朝、二階（彼の部屋から言うと、三階）の各室を廻って、汚れ物を大きな籠に集め、それを抱えて、転げ落ちぬように気をつけながら地下室の階段を下りてゆくことになった。それを洗濯機にほうり込み、洗濯が終わると乾燥機に入れ、出て来たのをたたみ、その中のあるものにはアイロンをかけ、再び籠に入れて二階に持ってゆく。

この家には十五歳を頭に、五人の子供がいたが、それがみんな女の子だった。一日に二回ぐ

らい着換えをし、寝巻パジャマも毎日取り換えるので、二階に上ってゆくと、いたるところに下着類が落ちていた。出来上った洗濯物を持って、上ってゆくと、武郎はまたそれらを拾い集め、洗濯したばかりで着ていないように見えるものまでも、かまわず籠の中に入れ、また地下室に運んでゆく。一日中洗濯をしているようなものであった。

そのほか、食事の後の片付け、食器の始末（洗うのは皿洗い機がやった）、一週に一度の部屋の掃除、庭の掃除や水撒き、などがあつたが一日のうち、地下室で過す時間がいちばん多かつた。

（こんなにたくさんさんの洗濯を、いままでどうしていたんだろう）

武郎は、洗濯機と乾燥機から立ち上る蒸気と温風の中で考えた。

夫人は、さえずり立てる子供達を、移動する巢の中の小鳥のように、ステーション・ワゴンに乗せて、食料品の買出しや、ショッピングや、その他武郎には見当のつかないところへ、毎日のように連れて出かけていた。ハイスクールの長女は、長電話をしているか、友達のところに行きに行っているか、昼間家にいることはほとんどなかった。誰も、洗濯ということが地下で行われているということ、いままでも行われていたということ、を知っているような様子は見えず、朝脱ぎ棄てた下着が、夕方再びベッドの上にあるという不思議を、改めて考えてみる人間もいなさそうであつた。要するに、武郎は無視されるか、それに近い状態だった。

ただ一人だけ、地下室を訪れてくる人間がいた。五歳のキャシーである。

「タケ」と彼女は、階段を二三段下りかけながら、下をすかして見るような恰好で呼んだ。
「入^{マイライカムイン}ってもいい」

「イエス」と武郎が言うまでは、下りて来ない。

「もう入って来てるじゃない」と言って、笑うと、

「うん。でも、忙しければ、また来てもいいよ」

と答えたこともあった。

最初彼女は、武郎の持ち物を仔細に調べた。

「写真はないの、家族か何かの」

「ないよ」

「なぜ。お父^{ダディ}さんやお母^{ママ}さん、いないの」

「いるけど……写真はみんな日本に置いてきたよ」

「なぜ」

武郎は答えに窮する。

「ガールフレンド、いる？」

武郎はちょっと考える。

「いるよ」

「写真ある？　それも日本に置いてきたの」

「ノー。彼女はサンフランシスコにいる」

「ふうん」

キャシイは眼を大きく開いて、武郎を見た。

「会いに行かないの」

「会いに？」

武郎は首を振る。

「忙しいんだよ」

「電話すればいいじゃない」

「電話？」

武郎はびっくりする。そんなことすら考えたことのない自分に驚くのだ。彼は自分の境遇を考える。

「そのうちするよ」

「キスしたことある？」

「え？　あるよ」